The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドーノワ夫人のSerpentin Vert「緑色の蛇」における好奇心 : 読書する女性に対する偏見への抵抗
Author(s)	中島, 姫奈
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 79-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91189
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドーノワ夫人の *Serpentin Vert*「緑色の蛇」における好奇心

―読書する女性に対する偏見への抵抗―

フランス文学　博士後期課程 1 年

中島　姫奈

はじめに

17 世紀フランスにおける妖精物語作家ドーノワ夫人は 1697 年に全 4 巻から成る妖精物語集 *Les Contes des Fées* を出版した。そこに収録されたおとぎ話 *Serpentin Vert* は悪い妖精の呪いによって世にも醜い姿に変えられた姫レドロネットと緑色の蛇の愛の物語である。レドロネットは自身の醜さに苦しみ、人目を避けて逃げた先で歌って話す人形パゴダの王国にたどり着く。そこで姿の見えない王に求婚される。王は姫に 2 年間決して自分の姿を見ないことを約束させ、彼女が約束を守って 2 年が過ぎたら自分の姿を見せることが出来るようになり、姫の美しさも取り戻せると話す。人形たちは退屈していた姫にプシュケの物語を読むように勧め、夫はプシュケのように悪い好奇心を抱いて自分の姿を見ようとしないように再度警告する。姫は家族を呼び寄せるが、姿の見えない夫を不審に思った彼らに唆されて寝室で眠る夫の姿を見てしまう。その正体は醜く恐ろしい緑色の蛇であった。実は彼もまた悪い妖精の呪いによって姿を変えられており、後 2 年で呪いが解けるところだったのである。

この物語はアプレイウス及びラ・フォンテーヌによるクピドとプシュケの物語を源泉としているとされ、姫が姿の見えない相手と結婚し、夫の姿を見ないように約束させられ、呼び寄せた家族に唆されて夫を見てしまうといった一連の流れを踏襲している。夫は姫に好奇心を持ってしまったら自分も姫も苦しむ事になると何度も忠告している。さらにプシュケの物語に言及し、プシュケが辿った顛末をよく考え、不幸を避けるために役立てるようにと告げている。物語の終わりに添えられた教訓においても好奇心を持つことが不幸の原因になると説いている。先行研究においては夫の正体が緑色の蛇であったことから蛇を男性性のシンボルであるとし、レドロネットが夫の姿を知ろうとした好奇心は女性の性的な好奇心であると述べられている。しかし、性的なものという解釈のみに留められるのだろうか。

本発表ではレドロネット姫がプシュケの物語を読んでいて、それを教訓とするようにされている点に注目し、不幸を招く好奇心とは何なのかを好奇心と訳される単語 curiosité の分析と女性と読書の観点から探る。

Imprudente curiosité

姿の見えない夫はレドロネットに、彼女が imprudente curiosité を持っていれば自分は苦行を繰り返さねばならず、彼女も苦痛を分かち合うことになると警告する。Inprudente curiosité は直訳すれば軽率な好奇心だが、単語の意味をもう少し詳細に分析する。Curiosité は好奇心を意味するが、詮索好きといった軽蔑的な意味合いも含む。17 世紀においては注意深さ、細心、奇妙、珍しさといった意味もあった。さらに、キリスト教における三大邪欲、感覚欲、知識欲、支配欲のうちの支配欲に相当するほど悪しきものと認識されていた。また、imprudente は軽率、分別がないという以外に危険、無鉄砲を意味する。いずれにせよこの文脈においては否定的な意味合いであることは間違いない。忠告されたにも関わらず夫の姿を見たいと思ったレドロネットは果たして単なる軽率な詮索好きだったのだろうか。彼女が抱いた好奇心は危険だったのか。源泉であるラ・フォンテーヌのプシュケの物語において、好奇心は女性の持つ悪い性質であると述べられている。好奇心によって禁忌を冒し不幸を招いた女の例はエヴァやパンドラ等が挙げられるが、それほど古くから女性と好奇心イコール悪、というイメージが形作られてきた。プシュケは姿を隠したクピドの宮殿で何不自由なく暮らしているが、夫の顔を知らずたった一人で過ごすことに退屈と不満を抱く。姉たちに会いたいと懇願するプシュケに、夫は神を汚す好奇心に負けてはいけない、さもなければ破滅へ突き落されると警告する。好奇心の解釈において、ルネサンス期ではボッカチオが、プシュケがクピドの正体を知ろうとすることは彼の神としての性質、永遠性、事物の真理、万能性を知ろうとすることであり、人間がそれを知ってしまうと道を見失い、自分自身も見失うと述べている。自分自身の限界を超えようとする者は罰せられるということである。しかし、知ろうとするのが危険で悪いことならば、何も知らないでいれば安全で幸福なのか。ドーノワ夫人と同時代のおとぎ話作家であるペローは童話集の序文の中で、プシュケは自分の夫について知らない限りにおいて幸せであるべきだったということに疑問を呈している。

疑惑と運命

レドロネットの家族は彼女の夫がいっこうに姿を現さないのを不審に思って何度も質問し、レドロネットはその度に戦争に行っているとか狩りに出ている、あるいは病気であると言って誤魔化したため、家族はますます怪しく思って問い詰め、ついにレドロネットはまだ一度も夫の姿を見たことがないが、もしかしたらプシュケのように夫の正体は愛の神なのかもしれないと語った。家族は彼女の夫は化け物であると言い張る。レドロネットは疑惑と不安に駆られ、プシュケがそうしたように夫の正体を確かめずにはいられなくなる。そんな彼女の様子が fatale curiosité という言葉を用いて描かれている。これは彼女に多大な犠牲を払い、数多の恐ろしい例があってもそれらは私たちの行動を改めさせることは出来ない。Fatale は致命的と訳される。それほど危険で有害な好奇心であるとされてい

るが、同時に運命、予定された、起こるべくして起こること、逃れられないといった意味を持つ。レドロネットが約束を破って夫の姿を見ることは最初から決められた運命であり、どうやっても変えられなかったということになる。詮索好きな性質を非難しておきながら、それが必然であるかのように述べている。当時、女性には好奇心の強さ、誘惑への弱さが本質的に備わっているとされた。女性の精神は男性に比べて影響を受けやすく出来ていると考えられていた。

教養と才女

女性と禁じられた対象への好奇心について、1630 年代には Du Bosc が女子教育論の中で女性と読書について言及し、禁じられているということを知るだけである本を読みたいという好奇心を抱かせるには十分であると指摘している。彼は女性に本を全く読ませないわけではないが、小説は絶対に読ませてはいけないと述べている。当時の女性にとって読むことが奨励されているのは宗教に関する書物が一般的であったが、貴族女性によって文学サロンが主催され、女性たちは田園小説や騎士道小説を読みふけり、やがてそれがおとぎ話の流行に繋がっていった。これらの小説のテーマは女性への愛と忠誠であった。サロンの女性たちは愛や結婚について語り合い、文学に関する談義や言葉、表現、振る舞いにおける洗練さを競った。彼女たちは文学的な教養を身に付け、即興で芝居や物語の創作が出来るほどの才気を備えていた。こういった女性を précieuse（才女）と呼んだが、この言葉には賞賛だけでなく否定的な意味もあった。教養をひけらかし、洗練さを追求する姿が滑稽な「才女気取り」と皮肉ったのである。「才女気取り」はモリエールの戯曲の一つのタイトルとしても用いられている。彼は 1672 年に発表した戯曲 Les Femmes Savantes（女学者）においても詩作や学問に傾倒する女性を嘲笑う一方で学問には興味を示さない女性を最も機知に富む存在として描いている。女性と学問について、フェヌロンが女子教育論の中で言及している。少女にあまり学識があるのは好ましくない。好奇心が彼女たちを虚栄心に満ちた才女気取りにしてしまう。女子に必要な教育は、結婚してから家庭を切り盛りし夫に従うためのもので十分である。

Serpentin Vert の物語の中でも夫の姿を見てしまった後のレドロネットが、かつて彼女に醜くなるように呪いをかけた悪い妖精から皮肉を込めて docteur, raisonneuse と呼ばれ、蟻に哲学の講義でもせよと罵られるシーンがある。レドロネットはプシュケの物語を読む他、歴史の本を読んだり自省録を読み書きしており、学問に興味を持っていることがうかがえる。一方で彼女の双子の妹ベロットは輝くほどに美しいが、学問への興味は描かれない。容姿の美しさ以外にこれといって性格や特技については言及されず、美しさゆえに周囲から愛され賞賛され、早くに結婚している。容姿が醜く小説を読み学問の素養を持つレドロネットと、美しい容姿のおかげで愛されて結婚するが、外見の美しさ以外に言及されないベロットが対比されているかのように見える。自身もサロンに出入りし、また主催していた作者ドーノワ夫人が文化的教養を持ち、小説を読み書きする女性としての意識

を持っていたこと、そのような女性が時に「才女気取り」と揶揄される状況について考えることがあったのは想像に難くない。

女性の自立

ラ・フォンテーヌのプシュケは姿の見えない夫の正体は怪物ではないかという疑念が拭えない。姿を見せてもらえない限りは愛せないと断言する。寝室の暗闇の中、手探りで触れるが、それだけでは夫が本当に怪物ではないのか確信を持てないと不満を抱く。自分の目でしっかりと見ない限りは夫も愛も受け入れられないのである。夫はプシュケを好奇心と虚栄心に満ちていると非難する。レドロネットがこの物語を読んで何を考えたのか。プシュケを愚かで悪い例として警告する意図があったとしても、姿を見ないことには愛せないというのは悪いことなのだろうか。Curiosité には注意深さという意味もある。誰かも知れない相手の言うことを鵜呑みにして与えられるものをただ享受する状況にレドロネットは疑問を抱いていた。プシュケの言動がそんな彼女の疑念を後押ししたのは間違いない。彼女は先人であるプシュケの真似をしなければ後悔すると考えていた。La Barre は女子教育の課題に女性の自立を取り上げている。特に貴族の女子は常に誰かに守られ従属する環境にいて、その状況を自ら望むように教育されるため一人になるのを恐れる。彼は女性の知識が針仕事か宗教に関することのみに留められてしまうことが外見の美しさへの固執と虚栄心に繋がると警告した。そして本を読み教養を身に付けると嫉妬によって「才女気取り」と糾弾されると述べた。プシュケが人間の身でありながら神であるクピドの正体を知ろうとしたのは彼女には過ぎたことだったならば、レドロネットは女性には必要がないとされた知識を身に付け、それによって自分の状況に疑いを持ってしまった女性と考えられる。疑いを抱き、暴いて知ってしまったらそれまで享受していた幸福を失うという前例があっても、自分の目で見て確かめずにはいられない。好奇心を抱かせたくないならレドロネットにあえてプシュケの物語を読ませる必要はなかっただろう。しかし彼女はそれを読み、しかも勧めたのは人形たちである。サロンの女性たちは小説を読み、知識を身に付け、当時の女性を取り巻く状況に疑問を抱き、愛や忠誠に関する小説を書いた。レドロネットは単なる軽率な詮索好きではなく、夫の正体を自分の目で見ることを自らの意志で決定した。それまでの幸福を失うことになっても、注意深く、隠されていることを知ろうとした。女性がいつまでも本を読まず、知識もないままでなく、サロンの活動や女性の知識についての新しい意見が出てきたように、女性が知識を求め状況に疑問を抱くのはどんなに非難されても変えられないとドーノワ夫人は考えていたのではないか。好奇心を不幸の原因とし、レドロネットやプシュケを愚かであるかのように述べながら、時に不幸になったとしても女性が自分で物事を知ろうとする姿勢を描こうとしたのではないだろうか。